



# 羅針盤

2015年度 第2号  
都立豊多摩高等学校  
進路図書部

2015（平成27）年4月28日発行

小説家の村上春樹が、共同通信のインタビューに応え、創作の道筋を説明する中で「**自分の無意識の中にある羅針盤**」という表現を使っていた。

## 自分は今、何をすべきか？

村上は、現代が善悪不分明の時代——「この世には絶対的な善もなければ、絶対的な悪もない」という時代であることを前提にしたうえで次のように述べている。

**村上** 僕の小説はある意味では「ロジック（論理）の拡散」という現象に併走しているんじゃないかと思う。僕は小説を書くにあたって意識上の世界よりも意識下の世界を重視しています。意識上の世界はロジックの世界。僕が追究しているのはロジックの地下にある世界なんです。

—その世界の特徴は？

**村上** ロジックという枠を外してしまうと、何が善で、何が悪かがだんだん規定できなくなる。善悪が固定された価値観からしたらある種の危険性を感じるかもしれないですが、そのような善悪を簡単に規定できない世界を乗り越えていくことが大切なのです。でもそれには**自分の無意識の中にある羅針盤**を信じるしかないんです。

—村上さんの物語はその闇のような世界から必ず開かれた世界に抜け出てきます。その善い方向を示す**羅針盤**はどこから生まれてくるのですか？

**村上** 体を鍛えて健康にいいものを食べ、深酒をせず早寝早起きする。これが意外と効きます。一言でいえば日常を丁寧に生きることです。すごく単純ですが。

（「村上春樹さん、時代と歴史と物語を語る」（聞き手は共同通信編集委員・小山鉄郎）「東京新聞」2015年4月17日（金）朝刊6面）

ロジック（論理）は、善悪を見極める方法。それが通用しない現代を生きる私たちは、羅針盤なしで外洋を航海する船のようなものである。人知を尽くし最善の道を探すしかない。その「人知」こそ「**自分の無意識の中にある羅針盤**」であり、闇の世界を切り開くときの拠り所になるというのである。

村上の発言は、**なだいなだ**のエリート患者が陥った苦境（前号）を照射する。彼は、所与のルールを前提とした社会、学校や病院では評価されたが、自分で方向を選択し、自力で道を開拓し、自分の意志で進まなければならない社会では、道に迷ったあげく、アルコールに頼る失敗を繰り返すしかなかったのである。

そんな陥穽に落ちないために、高校生の間に、将来を切り開く羅針盤を手に入れたい。私たちは「ルールが私の自由を奪っている」と考えるけれど、ルールに守られてもいる。学校では、努力は正当に評価されるし、再出発の機会も与えられる。大海ではそうとは限らない。

村上の最後の提言は、肩透かしに感じるが、的を外してはいない。マニュアルにできないのである。アプローチの仕方は千差万別。誰にでもいえるアドバイスは、健康に気をつけて丁寧に、というわけである。

ただし、高校生の間にも、それまでに体得した羅針盤を試されることがある。学校行事や部活の試合など。漠然と参加するのではなく、試されていることを念頭に置けば、その自覚が君の姿勢に影響するだろう。その繰り返しが羅針盤の獲得につながる。勝敗や成功を意識して果敢にチャレンジすることである。

高校生活最後のハードル・大学受験は、個々の「こころの羅針盤」の性能を測る最後の機会である。見守っていると、訴えてくる苦況にパターンがあることに気づく。ひとつは、今までの模試の結果はよかったのに最後の模試に限って振るわなかった場合。12月に入ると、毎年現れる。もうひとつは、センター試験の1

日目でしくじる場合。翌日もあるから誰にも相談できない。最後は、1校目で失敗した場合。滑り止めが滑り止めにならず、自信喪失がドミノ倒しになりかねない。こんなとき、「こころの羅針盤」が試される。私たちは機会があれば「模試は、欠点を見つけるため」「終わったもので、くよくよしない」「2日目が終わるまで、1日目はふり返らない」「今までどおり、**淡々とやる**しかない」などとアドバイスする。

卓球の**石川佳純**が想起される。

2011年5月の世界選手権（オランダ）の3回戦。ロンドン五輪シングルスの出場枠がかかっていた。相手は**ヤン・ハウ**（韓国）。石川は、試合開始から3ゲーム連取した。

五輪切符まで、あと1ゲーム。試練は、そこから始まった。

「3対0でリードした時『勝ちたい』っていう欲が出てきてしまっ。それまでは、ただ『思い切ってプレーしよう』ってだけ考えて、試合に入れてたんですけど。3対0になって『あっ、勝てる』って思い始めて。最初の3ゲームは、相手のいろんなコースに攻めることができました。でも負け始めたゲームは、フォアとミドルにしか打ってないんですよ。バックは全然混ぜてない。相手（ヤン）はフォアが苦手なんで、フォアを攻めなきゃいけないんですけど、でも、ずっとフォアにしか打たなければ、誰でも返せるようになります。フォアにばかり打って『ミスして！ミスして！』みたいになっちゃって」石川はプレーが単調になり、自分からリスクを冒さなくなった。逆に、あとのないヤンは、危険を冒して大胆に強打してきた。第4、第5ゲームを奪われ、ゲームカウントは3対2。第6ゲームも序盤で1-4とリードされた。

「第6ゲームも最初は攻める気持ちがなくて。でも1-4になった時『このゲーム取られたら、負けるな』って思ったんですよ。これを取られたら、パニックになって、もうだめだろうなって」

同じ時刻、平野も別のコートで3回戦を戦っていてリードしていた。石川が逆転負けすれば、五輪切符は平野の手に渡る状況だった。もちろん石川に、平野の試合経過など分からなかったが、負ければ切符も失うと考えて試合に臨んでいた。

このような崖っぷちに追い込まれると、石川はいつも自己探求を始める。**自分は今、何をすべきか？**

「セルフトーク」、自分への語りかけによって、**やるべきこと**を見出すのだ。この時の問題は、**まだ取るべきポイントが残っている**にもかかわらず、目の前にぶら下がった勝利という結果だけを欲しがっていることだった。

『なに勝とうとしてんの？』って、声に出して、自分に言い聞かせて『しっかり自分のプレーやっ。よ！』って。相手は韓国人だから、日本語、分かんないじゃないですか（笑）。だから、試合中なんですけど、言いまくりなんです。ボール拾いに行く時とか。『サーブ出したらしっかり戻って！』とか。頭の中で考えているより、**声に出して、自分に言い聞かせるんです**」

そこから石川にスイッチが入った。再び、勝つために取るべきリスクを取り始めた。ラリーの中で、相手より先に強打を繰り出し、4連続得点で5-4と逆転。そのまま11-8でこのゲームを奪った。最後、サービスエースで勝利を決めると、堰を切ったように涙があふれ、ヤンと試合後の握手を交わしたあと、タオルで目を拭いた。

小川勝「私を励ます私の言葉」（「Number」779号、2011年6月9日）99～100頁

苦況に立ったとき、大切なのは、**自分がすべきこととできないことを選び分け、できることに全力を傾注**することである。できないことをやらなければならないと考えると、地に足がつかなくなる。試験の最中ならば、まず大きく**深呼吸**して、石川佳純のように、心の中で、**自分は今、何をすべきか、自分に問**いかけるのである。勉強でもスポーツでも、苦しいとき思い出してほしい。

**進路室案内** 進路室で、資料や**過去問集**（赤本・青本・黒本）を借りることができます。教員が不在のときは、職員室の進路図書部（右奥）に相談してください。貸出業務は**昼休みと放課後（～17:00）**、貸出期間は、**2泊3日**です。みんなの共有財産ですから、教室や自習室に放置せず、大切に扱ってください。